「反・反骨の大衆作家」としての高橋鐵

―『南方夢幻郷』とその周辺資料から―

櫻庭太一
専修大学文学部兼任講師

はじめに

日本における性メディアの変遷を語るとき、とりわけ注目されるのが昭和二十年、すなわち敗戦とそれに続く戦後の「解放」によってもたらされた性関連出版の公然化と爆発的膨張であろう。それは、いわゆる「カストリ雑誌」の流行や性解説書の刊行ブームを筆頭に、現代の日本における「性」関連の知識、娯楽コンテンツ市場の巨大化・多様化の始点となった。だがそうした「性」を巡るメディアの多様性の中にありながら、性およびそれを語るコンテンツの多くは、卑近で安価な快楽に結びつくもの、一般大衆に好まれる低俗性につながるものとして捉えられてきた。

そうした中で、昭和二十年代～三十年代を代表する「性研究者」として活躍した高橋鐵は、強い衒学性と〝反権力〟の姿勢を通じて「性」を語ることの意義、とりわけ知識人の語るべき（あるいは語りうる）対象としての価値

付けを訴え、戦後の性メディアのあり方に強い影響を与えたと言える。彼のそうした姿勢は必然的に高橋を「反骨・反権力の人」として位置づけることになり、高橋の生前、そして没後の評価もそれに沿ったものとなっている。しかし、戦前の活動では必ずしも「性」をメインフィールドにしていたわけではない高橋[1]が、なぜ戦後「性研究の偶像（アイドル）」になろうとし、またなり得たのか。そこには「反骨精神」や「性に対する個人的関心」のみで語りきることのできない、彼の時代や自分の立ち位置に極めて敏感な、ポピュリスト的な一面をうかがうことができるのではないだろうか。そして同時に、高橋なりの作家として、また〝広告人〟としての計算と野心そして転身を決意するに足る「時代状況」があったはずだ。

本稿の趣旨は高橋鐵が戦前に刊行した最後の小説集『南方夢幻郷』と同時期のコラム作品の解題を通じて、そうした時代状況、そして自分の立ち位置に極めて敏感な、ポピュリスト的作家としての彼の一面を明らかにすることであるが、併せて、論者の最終的な目的である戦後メディアにおける性コンテンツ需要とその変遷研究の第一段階とすること、同時に、高橋鐵をその変遷の〝体現者〟の一人として位置づけることを目的とする。

一　高橋の履歴と没後の評価について

まず、高橋鐵の履歴について簡単に触れておこう。

明治四十年に東京市芝区に生まれた高橋は、日本大学で心理学・フロイト精神分析学を学ぶとともに、カルピス株式会社宣伝部で広告制作に携るなど青年期から宣伝業界と関わりを持った。昭和八年十二月には大槻憲二主催の

東京精神分析学研究所に入所（二十六歳）。この時期から小説誌・業界誌で短編小説、コラムを発表しはじめ、昭和十六年には小説集『世界神秘郷』（霞ヶ関書房）、十七年に本稿で採り上げる『南方夢幻郷』（東栄社）を刊行している（三十四～五歳）。しかし、彼の名を広く世に知らしめるきっかけとなったのは戦後の昭和二十四年、四十二歳のときに刊行した性生活解説書『あるす・あまとりあ』（あまとりあ社）のヒットだった。続いて雑誌『あまとりあ』（同）等での記事執筆、性生活・性科学の一般向け解説書を次々と手がけ、高橋は昭和二十～三十年代を代表する性風俗研究家としてその名声を高めていく。また昭和二十九年からその晩年まで、自身が主宰した日本生活心理学会の機関誌「セイシン・リポート」の猥褻性をめぐり当局と争ったいわゆる「高橋性学裁判」を闘うも敗訴。昭和四十六年に胃癌のため六十四歳で死去した。

こうした高橋鐵その人とその活動は、没後どのように評価されたのか。晩年の高橋に師事した鈴木敏文は、平成元年に刊行された『新文芸読本・高橋鐵』所収のコラム「性解放の灯火を掲げて　高橋鐵小伝」で次のように総括している。

> 昭和十六年四月、日本人の生活意識の調査研究を目的とした「日本生活心理学会」を創設。「日本生活心理学会」は鐵の思想・行動・生活の基盤であり牙城となるわけだが、もし彼が憲兵隊の威嚇を受けることなく作家活動を継続していたなら、おそらく「日本生活心理学会」の誕生はなかっただろう。ということは戦後の性解放・性啓蒙運動の先頭に立ち、満身創痍になるのをいとわず権力の弾圧に抵抗し続け、六十余歳で殉職するという名誉とも悲劇とも解せるような人生を送らずともすんだはずだ。（同書十九頁）

また、生前の高橋を自作「新宿泥棒日記」に出演させた映画監督・大島渚は、『えろちか臨時増刊・高橋鐵特集』（昭和四十六年）掲載のエッセイ「性の虚偽を暴く」に次のような追悼文を寄せた。

言うまでもなく、先生の性の解放は、人間の全的な解放につながるものであった。それをめざすゆえに、先生が戦前、戦中、戦後にわたって権力による迫害をこうむられたことは知る人ぞ知っている。その先生はこの虚偽に満ちたポルノ時代の前に死んでゆかれた。（同二六八〜二六九頁）

映画制作を通じて権力との対峙、権力と闘う人々を採り上げ続けた大島をして「先生」と呼ばせている点に、生前そして没後の高橋に対する評価の一端があらわれていると思われるが、こうした「権力との闘い」については高橋本人も戦後、積極的に語っており、昭和二十八年に再刊された小説集『世界神秘郷』の前書きで次のように語っている。

本書におさめた『太古の血』（いわゆる紀元二千六百年新春発表）が、当時の文学賞をくれるとやらの噂なかばにして、突然、憲兵隊や文部省の咎めるところとなり、私は囹圄の身となるかわりに、憤然として、戯作の筆を折ってしまった。

ここで高橋が語る『太古の血』の一件とは、彼が昭和十五年『オール読物』新年号に発表した同作の内容を不穏当であるとみなした当局の圧力をきっかけに小説創作を断念したとする「筆禍事件」を指している（鈴木が触れている「憲兵隊の威嚇」も同様）[2]。

今日、高橋鐵を語るに際してはこの筆禍事件と「高橋性学裁判」がまず採り上げられ、性研究とともに「反権力と反骨」の姿勢が強調されることが多い。その要因の一つは、前述したように戦後の高橋自身がメディアへの露出、あるいは裁判を闘う中での一種の〝武勇伝〟としてそのエピソードを語り続けたことが挙げられよう。つまり、今日における「反骨の人」イメージと評価は、高橋自らの後半生の活動および発言、そして周囲の証言を中心に形成されていったものなのである。だが本書『南方夢幻郷』刊行前後、すなわち高橋の前半生における活動の多くは、

必ずしもそうした見方を全面的に肯定するものではない。まず『南方夢幻郷』の概要を紹介した上で、彼の戦前の活動について触れていこう。

二　『南方夢幻郷』の概要について

『南方夢幻郷』（東栄社）は、昭和十七年七月に刊行された高橋鐵二冊目の小説集である。高橋の商業誌デビュー作「怪船人魚号」をはじめ、『オール読物』・『新青年』での掲載作三作品および初出不明（おそらく書下ろしと思われる）二作品が収録されている。以下に、各収録作タイトルと初出・主な舞台となっている地域、およびあらすじを簡単にまとめたものを列記する。その記載順は本書収録順に倣い、内容、表記はすべて昭和十七年刊行の東栄社版[3]に依った。

・「蕃女の涙石」（『新青年』昭和十四年九月号／ニュージーランド）

東京で開かれた海洋博覧会に出かけた「私」は、友人の紹介でマオリ族酋長の娘タウポと出会う。彼女は「ハカ」という日本人を探していたが、それは「私」の知人で数年前から精神病院に入院している袴田哲夫であることが判明する。タウポは彼女と袴田とが強い恋愛感情で結ばれていたこと、そして袴田が火山の噴火に巻き込まれ重傷を負った際、共に死ぬ覚悟でマオリ族の秘石「涙石」を彼の脳に埋込んだことを語る。「私」はその涙石が彼の精神病的症状の原因と推理、さっそくその除去手術が行われる。やがて回復した袴田はタウポの元へ旅立ち、自らの著

書『南洋土俗考』を完成させる。

・「浦島になつた男」（『新青年』昭和十三年四月号／香港、日本）

青年精神科医の久門は、水におぼれる妄想に苦しめられている元船員の患者・象潟儀一と出会う。久門は彼の症状から母親への強い憧憬を読み取り調査を続けるが、その最中、象潟が以前乗り組んでいた船の貯水タンクから彼の恋人・お琴の死体が発見される。当初は単純な痴情犯罪と思われたが、久門の推理によって実は象潟の父親が真犯人であり、事件の裏に象潟のエディプス・コンプレックスが深く関与していたことが判明する。事件解決の後、久門は象潟に彼の妄想と苦悩の原因を取り除く治療を施す。

・「怪船「人魚号」」（『オール読物』昭和十三年十一月号／シンガポール、南太平洋）

老外科医であるゲルハルト・コッホは、ある日突然「南太平洋で人魚を捕獲する」ことを宣言し世間を驚かせる。だがそれは、病に冒された恋人フリーダの命を救うため、彼女の身体を魚とつなぎ合わせ「人魚」とする恐るべき手術を行うための旅であった。やがてすべてが露見し、乗船者達と警官隊に取り込まれたコッホは、人魚となったフリーダと共に果てしない大洋へと身を投じる。

・「神聖植物」（初出不明／日本）

心理学科の学生・鳥羽誠は、服用者に無意識心理を語らせる作用を持つ植物「ボタン・デ・メスカル（メスカリン）」の研究に取り組む一方で、研究者としての道を捨て恋人の柳サユリと結ばれたいという思いを抱えていた。ある日、故郷の母が病に倒れたサユリは鳥羽への負担を恐れて別れを切り出すが、鳥羽はそれを拒絶する。苦悩の末、サユリは母の治療費工面のため資産家の青年・大畠と関係を持ってしまう。その告白を受けた鳥羽はサユリの真意を探るため、彼女の同意を得てメスカリン実験の被験者とする。実験の最中、サユリは幻覚に苛まれながら鳥

羽との別れを望む無意識心理を吐露するが、鳥羽はもう一度彼女と暮らそうと決心する。だが翌朝、サユリは自殺をほのめかす遺書を残して姿を消す。動揺する鳥羽に対し、指導教授の西川は「弔合戦」のつもりでサユリの実験データを元に論文を書けと叱咤し、奮起した鳥羽は渾身の論文「幻覚の心理機制」を書き上げる。

・「聖パウロの冥婚」（初出不明／北ドイツ・ハムブルヒ）

ドイツのハムブルヒを訪れた日本人青年・清水は、ある祭りの夜に神秘的な美女エリカと出会う。二人は急速に交際を深めていくが、数ヶ月後エリカは遺書を残し突如失踪する。悲嘆に暮れる清水は心霊研究者の梅田教授の紹介で「国際秘力研究所」が主催する降霊会に参加、そこで「エリカの霊」と再開する。驚喜した清水は以後エリカの霊に会うため降霊会に大金を費やすようになる。ところがある日、エリカの霊は彼に「今日が最後」だと言い再び姿を消す。その行方を追った清水は突如現われた秘密結社により暴行され、エリカが彼らと対立する組織の一員であると明かされる。茫然とする清水のもとに、梅田教授から武器を携えて「今夜十一時二十分発の伯林特急Ｎ７号車」に乗り、そこにいるエリカを助けて欲しいと依頼する手紙が届く。エリカが生きていたことの喜びと困惑、そして疑念とに混乱する想いを抱えながら清水はその列車へと向かう。その後、清水が列車の中でドイツ左翼過激派の女党員（実はエリカの妹）を射殺し逮捕されたこと、そして精神異常と判断されすぐに釈放されたものの、右翼団体主催の祝宴に出席中、突然エリカの名を叫び拳銃自殺したことがエピローグとして語られる。

世界各地を舞台としたミステリー、サスペンス小説が収録されているという点では前年に刊行された『世界神秘郷』と同様であるが、古代から現代まで様々な年代を舞台としていた『世界神秘郷』に対して、本作では作品内の設定年代が現代（掲載時とほぼ同一、あるいはややさかのぼる程度）に限定されている点が主な違いとなっている。

その表題からは東南アジアおよび太平洋オセアニア地域などを舞台としたエキゾチズム溢れる作品集を想像させるが、本作中厳密な意味で「南方」を舞台としている作品はニューギニアが舞台となる『蕃女の涙石』、同じく南太平洋上が舞台の『怪船「人魚号」』の二作のみで、後の三作品は日本や香港(『浦島になつた男』および『神聖植物』)、ドイツ(『聖パウロの冥婚』)など、必ずしも「南方」には含まれない地域が舞台となっている。また本書では前年の『世界神秘郷』収録作に顕著だった「異郷を舞台に活躍する日本人主人公」、「現地の謎めいた美女」といった高橋の小説で多用される定型パターンが少なく、高橋のデビュー作から戦前の最後期作までの比較的長いスパンの作品が、やや強引ながらも「南方というキーワード」でまとめられた作品構成となっている。そうしたある種の〝曖昧さ〟をにじませた本書の刊行背景を俯瞰する最初の手がかりとなるものが、次に示す、冒頭の岩倉具榮[4]による序文であろう。

先に、小説集『世界神秘郷』を世に送って、洛陽の紙價を高からしめた高橋鐵君は、ここに又『南方夢幻郷』を出版して、南方への情熱と、科学する心を吐露されたのである。

(中略)

殊に、大東亜戦争勃発以来、皇軍は、陸に海に、空に、太南洋を席巻しつつある時、日本人の南への夢は、今や現実化されたのである。

日本の東亜共栄圏建設は、既に緒に付かんとしていゐる。この時、南方への夢と科学を表現した、高橋鐵君の著書が上梓されることは、まことに時宜を得たものと思ひ、世間一般にも寄與する所大なるを信じて疑はないのである。

(本書二〜三頁)

ここで岩倉が示している日本の南方進出をプロパガンダする視点は、太平洋戦争開戦から一年というその時期も

さることながら、岩倉が南方政策を研究する民間組織「太平洋協会」の理事だったことが大きく影響している。同協会は昭和十三年五月に設立された環太平洋地域の調査研究を目的とする民間団体で、その設立主旨に「我が國策の根本としての太平洋政策の樹立」を掲げ、副会長に満鉄総裁松岡洋右と拓務大臣永田秀次郎[5]、理事に知米派官僚の鶴見祐輔が就任する等、政財界に強いパイプを持った組織であり、その活動の一環として機関誌『太平洋』の刊行をはじめ種々のメディアを通じた南方政策の宣伝活動を行っていた。岩倉は当時この太平洋協会の常任理事のポストにあり、「南方」に関連した宣伝および出版物刊行に便宜をはかれる立場にあったと同時に、高橋が所属していた東京精神分析学研究所の創立メンバーの一人でもあった。まさに『南方夢幻郷』の刊行にあたって序文を依頼する対象としては最適の人物であったと言えよう。また高橋自身も本書刊行の二年前となる昭和十五年より「日本宣伝技術家協会」の理事に就任（後述）し国策宣伝事業に携っており、前掲の序文に続く高橋本人の「まへがき」においても、そうした立場を反映したと思われる時局についての肯定的な言及が各所に見られる。

これは、昨年望外の拍手を受けた幻奇小説集『世界神秘郷』に亜ぐ作品集です。

（中略）

『赤道下を飾るエメラルドの帯』東印度諸島の深海に実在するといふ人魚、。香港通いの貨物船から忽然と魂の故郷へ昇天する若い水夫。ニュージーランドにある世界一の火焔地獄メキシコの荒野に狂咲く幻妖な神聖魔草…さういふ南方の謎詩を夢み又科学したロマンなのです。文藝春秋社・博文館等の諸誌に発表したものも書下しの外におさめました。

これが幸いに、民族の魂を南へ誘ふ夢見草ともなりますでせうか。

（本書五～六頁）

傍線部に見られるように、このときの高橋には（後年、彼自身がアピールするような）権力への対決や〝反骨〟

の姿勢はうかがえず、むしろ状況を肯定的・牧歌的にとらえた前書きの執筆をためらっていないことがわかる。また前述したように、太平洋協会設立以前からの人脈ではあるが、同協会の理事として日本の国策を民間組織の立場からフォローする立場にあった岩倉に序文を依頼していること、そして小説集のテーマとして「南方」を選んだこと自体についても、この時期の高橋の「処世術」のありかたとして見逃すべきではないだろう。このように、戦後、自著で「性科学の立場から、無智と無思慮からくる性の因習をぶちこわす」[6]と唱え、『あまとりあ』から晩年に自ら立ち上げた『愛苑』（外苑書房）まで、雑誌メディアで一貫して当局の性メディア弾圧を批判し続けた彼の姿勢、すなわち、「反権力・反骨の闘士としての高橋鐵」像に背反するような活動は、次に挙げる広告業界における執筆作品において一層顕著なものとなっている。

三　高橋鐵の広告業界における活動

本書刊行に先立つ昭和十六年六月、高橋は日本電報通信社（現・株式会社電通）の主導により結成された「日本宣伝技術家協会」の理事に就任している[7]。同協会は電報通信社内にその本部を置き、「高度国防国家体制下ニ於ケル国家宣伝並ニ産業広告ノ技術的研究向上及実践」を目的に掲げ、政府および民間の広告技術に関する研究、輿論調査、宣伝業界関係者の名簿作成等を主務とした国策組織であった。そしてその就任以前の昭和十三年前後から、高橋は小説執筆活動と並行して、産業誌に時局状況を反映したコラム作品の寄稿を行っている。次のリストは同時期に高橋が業界誌に発表した作品のうち、現時点までに確認できたものの一覧である。

【昭和十三年】

「斯んな売出戦術がある！」（『製菓実験』三月号）
「必ず当る商略の巨弾小弾　菓子店の新戦術」（『製菓実験』四月号）
「これなら理想だ！非常時中元全勝街」（『商店界』六月号）

【昭和十四年】

「ユーモア店員小説　青春チラシ広告」（『商店街』四月号）
「広告ツクリカタ教室　国策にも副ふ色物広告講座」（『日本電報』八月号）
「広告界英雄伝（一）」（『日本電報』十一月号）

【昭和十五年】

「ヒツトラー君にノベル宣伝賞を贈るの辞」（『日本電報』新年号第一篇）
「広告界英雄伝（二）」（『日本電報』新年号第一篇）
「広告界英雄伝（三）」（『日本電報』新年号第二篇）
「広告演出家の挑戦動議　図案家取締案提唱！」（『日本電報』二月号）
「新広告道のために　図案屋的理屈一蹴！」（『日本電報』五月号）
「広告部員鑑別法（どんな広告人が優秀か戯論）」（『日本電報』六月号）

【昭和十六年】　※この年、「日本宣伝技術家協会」の理事に就任

「国家宣伝術建白十二ヶ條」（『日本電報』四月号）
「歴史小説　蛇の目独語　―武将宣伝戦記の内―」（『宣伝』五月号）

【昭和十七年】

「川柳日本宣伝史」（『宣伝』十月号）

「川柳日本宣伝史（明治大正昭和篇）終曲」（『宣伝』十一月号）

【昭和十八年】

「笑の宣伝術・漫考」（『宣伝』三月号）

この一覧から、高橋が電報通信社から刊行されていた『宣伝』『日本電報』を中心に、宣伝業界向けのコラムを多数執筆していることがわかる。その傾向として、昭和十四年の「広告ツクリカタ教室　国策にも副ふ色物広告講座」に見られるように、インパクトの強いタイトルと古今の雑学的事例・川柳から広告アイデアを提案紹介するというスタイルが多用されている点が挙げられる。昭和十五年の「ヒツトラー君にノベル宣伝賞を贈るの辞」では「敬愛するヒトラー君足下」というやや揶揄的なフレーズを繰り返しながら、ヒトラー政権が行っているプロパガンダ手法を例に広告制作に関する蘊蓄を展開しているし、昭和十七年の「川柳日本宣伝史」においても「（優れた川柳が）尤もらしい凡愚な大論説や小説よりもどれほど前線銃後の「士気」を鼓舞し、対外的にも意気を高揚することぞ！」と謳い、川柳作品に見る宣伝術について戦時色を絡めながら語っている。

このように川柳作品を絡めて時事や流行、性風俗を語る手法は、高橋に先行する宮武外骨や梅原北明、酒井潔らいわゆる「特殊文献」の書き手に多用される手法であるが、高橋の作風はその影響を強く受けつつ、時局に訴求するアクの強いタイトルや口上書きに加え、「広告界英雄伝」等で見られるように精神分析学や広告業界大物のエピソードを引用することで権威性と衒学性を強調するものとなっている（そして、この手法は戦後彼が手がけた性研究書にそのまま受け継がれていくこととなる）。

だがここでより注目すべきなのは、前述の「太古の血」による筆禍事件があったとされ、「憤然と筆を折った」はずの昭和十五年以降も、高橋はこうした作品を発表し続けていることである。この姿勢は、いかに文学者の徴用や執筆制限が課せられた―そうした作品以外の発表が実質的に不可能だった―時期にさしかかってのものとはいえ、やはり「戦前、戦中を通じて迫害を被り、それに対し反骨の精神を以て望んだ」とは解しがたい点があるように思われる。それどころか作品発表の数とそのタイトル、そして作品内の高橋の筆致からみる限り、高橋は積極的に「時局性にのった作品」群を発表し続けていたことがうかがえよう。むしろこの時期の彼は、「弾圧と忍従の時期だった」と振り返る自身の、そして周囲の評価とは裏腹に、実は「時事的なタイトルや口上書きで耳目を集めながら、得意の〝衒学性の世界〟に読者を巻き込んでいこうとする」技術を磨いた、すなわちメディア人としての高橋鐵が成長と活躍を見せた時代であったと言えるのではないだろうか。そして、こうした彼のあり方は、本書『南方夢幻郷』の刊行とその内容にも強く影を落としている。

四　高橋の小説創作に関する「意図」とその言及

高橋は東京精神分析学研究所の機関誌『精神分析』（昭和十四年九月号）誌上に、「精神病者を描いた文学」と題するエッセイを寄稿し、そこで自身の小説創作を「神話伝説の近代化」と「精神分析的探偵小説」という二つの動機から語っている。

そこで、私は。神話伝説を近代化しようと考へた。これならば、講談・浪花節の類よりもズツト根元的であ

らう。民衆心理学にも深遠な無意識面の活躍（白昼夢）がある。神話伝説を自然科学と社会科学の観点から分析し直し、近代的なストーリーを創らう。それには、勢ひ、精神病者を登場させると、合理的になる。

（中略）

そこで、私は、精神分析学の恩恵を判り易く大衆へ知らしめる為にも、斯学（対象としての無意識心理を、分析的方法で攻究して行く科学）を應用した探偵小説を書かうと考えた。そして犯罪を「探偵」するよりも、精神病（主として精神神経症―ヒステリー、強迫神経症、精神乖離症、パラノイア、メランコリア等）の病因を分析「探偵」する心理小説を書いてみたい。」（同四十頁）

ここから、この時期の高橋が小説活動を通じて自らの自然科学、社会学についての持論を展開し、「精神分析学の恩恵を判り易く大衆へ知らしめる」ことを主眼においた創作態度を持っていることがわかる。

本書『南方夢幻郷』においてもこの姿勢の反映は随所に見られ、例えば収録作の一つで高橋の小説処女作である「怪船「人魚号」（昭和十二年）では人魚に海、船といった「水」に関連したモチーフ[8]を使い、人と魚の接合により人魚を創造するという「禁断の手術」に手を出してまでも愛する女性（幼い頃に死んだ母親と死の病に侵された恋人）を取り戻そうとする医師コッホの狂気と熱意が描かれているが、この「失われた女性」とそれを取り戻そうとする男の狂気を描く展開は、翌十三年発表の「浦島になつた男」から戦前最後期作と思われる「聖パウロの冥婚」（あるいは「神聖植物」）まで、本書収録各作に通底している。そこでは「母」的な女性の喪失とそれを追い求めて精神的破滅・破綻を迎える男の物語が基本的なモチーフとなり、耽美的・猟奇的な描写と設定の違いによって各作品の色合いを変えてはいるものの、根本に描かれていることは常に同一であると言える。

こうした高橋の「精神分析的探偵小説」は、彼自身も多く寄稿した『新青年』等で先行して活躍した木々高太郎[9]

が「網膜脈視症」（昭和九年）や「就眠儀式」（昭和十二年）で見せたような物語の背景や犯人の動機描写に精神分析の知識を応用した手法と比較して、高橋による精神分析の表象論を物語の形で説きなおした、いわば「持論の解説」的作品としての色合いが極めて強い。言い換えれば、高橋はそのデビュー作から、「失われた女性」を追い求め、それゆえに〝狂気〟に追い込まれる男―それがハッピーエンドであれ、バッドエンドであれ―の物語を一貫して書き続けてきたと言えるし、それを通じて、「精神分析学の恩恵を判り易く大衆へ知らしめる為」の衒学的傾向の強い作品を書き続けてきたとも言えるのではないだろうか。そしてこのことは、「浦島になつた男」や「蕃女の涙石」、「怪船人魚号」に見られるように、事件の真相にいたるまでの謎解きが登場人物の一方的な推理、あるいは登場人物の独白によって唐突に解決してしまう展開の強引さ、物語性の希薄さといった彼の作品の〝弱点〟につながっている点も否定できない。例えば精神科医・久門を探偵役とした「浦島となつた男」では妄想患者が幼少期から抱えていたエディプス・コンプレックスによって母親の面影を宿す女を父と（それとは知らずに）奪い合ったあげく、父による「母」殺しへと至る悲劇が描かれるが、作中ではその過程や当該人間の感情の推移はほとんど描写されず、久門の一方的なひらめきと推理によって物語が進行するパターンが多出する。こうした傾向は『世界神秘郷』に収録された「氷人創生記」等、高橋の前期～中期の小説作品において強く、とりわけ『新青年』、『オール読物』掲載作では主人公の無謬性、万能性とそれに依拠した物語展開が頻出する。

その一方で、本書に掲載された「神聖植物」や「聖パウロの冥婚」においては、その衒学性と登場人物の設定・描写とが比較的バランス良く使いこなされるようになっており、前掲の三作品に見られるような、特権的な登場人物の〝解説〟を中心とした話にはなっていない（これは、前掲三作が紙幅の限られる雑誌掲載作であったのに対し、書下ろしのためある程度執筆時間やボリュームに余裕があったことも影響していよう）。特に「聖パウロの冥婚」は、

高橋の小説作品では珍しく「ヒロイン（が所属する組織）が主人公を陰謀に巻き込もうとしていた」ことをめぐって繰り広げられる物語であり、ドイツ国内の政治結社の抗争を背景に、恋人を失い憔悴した主人公が地下政治組織によって利用され、さらに味方と思われていた梅田の関与が明らかになる筋書きなど、それまでの高橋作品の中心に据えられていた「持論の演説」よりも物語性に中心を置いた複層的な展開が繰り広げられる。このように、基本的には「怪船人魚号」から続く「女性の喪失によって〝狂気〟に追い込まれる男の悲劇」のパターンを踏襲しつつも、それを上手くストーリー展開の中に回収する執筆手腕の向上が認められるなど、同作品からうかがえる高橋の小説創作の技術的、傾向的な変化は大きなものがある。本書刊行時期、すなわち十七年は、戦後の証言によれば「太古の血」をめぐるトラブル（昭和十五年）の影響により擱筆していたとされるモチベーション低下の時期であったはずだが、本書収録の「聖パウロの冥婚」はじめ、そのトラブル以後に書かれたとおぼしき作品はその完成度においてむしろ高まりを見せているのである。その観点からも『南方夢幻郷』は高橋の小説創作に於ける軌跡とその成長を見る上で重要な小説集であると言えるだろう。

五　『南方夢幻郷』と高橋の戦後との関連性について

その収録作品と同時期の周辺活動を俯瞰してみたとき、本書『南方夢幻郷』は戦時下において、太平洋協会理事・岩倉具榮の序文を付加し時局へのすり寄りを忍び込ませつつ、その内容としては岩倉が序文に謳う「南方への夢と科學」や戦意高揚といった要素よりもむしろ高橋自身が「幻奇小説」と謳う処女作「怪船「人魚号」」に見られ

るような耽美と悲劇の世界を展開すると同時に、創作のテーマとした「精神分析的探偵小説」の展開、そしてその発展版とも言える新作を掲載するなど、いわば同時期の高橋の実績と知識的引き出しの豊富さを示す一種の〝引き札〟的性格を強くもった単行本であることが指摘できる。また書き下ろし作品と思われる「神聖植物」「聖パウロの冥婚」では、高橋の作品の特徴でもある強い衒学性を小説の物語の中でうまく展開・着地させる技術の向上など、彼の作家としての成長が示されてもいる。

その一方で、本書の前書き、あるいは広告業界誌での活動に垣間見える高橋の時局下への〝すり寄り〟は、戦後の彼の活動・主張からすれば一種の「汚点」と見なされかねないものである。しかし逆説的に言えば、高橋はこのようにあたかも世に阿ねるかのような姿勢と、自分が関与できるあらゆる業界にくい込んでいく顔の広さと人脈を駆使することで、ほぼ全ての公然メディアが戦時体制に組み込まれ、書籍出版すら思うにまかせなかった昭和十七年という状況下での自らの小説集の刊行を可能にした、と言う事ができるのではないだろうか。そうした彼のあり方ついては是非が分れると思われるが、論者はそうした点にこそ、高橋の作家的（あるいはメディア人的）バイタリティ、そして高橋の戦前期の活動と戦後への繋がりを見る事ができるように思う。すなわち、本書と同時期の周辺資料は、幻想と耽美、そして喪失した女性を追い求めるロマンチスト的作家としての彼と、その豊富な知識を社会のニーズに合わせつつ世に出す器用さを発揮するリアリストとしての高橋鐵、その二面性を証明するものに他ならない。そこには、時局的状況への配慮をみせつつ自作を世に問い、その際には権威者や自身の立場を活用することも厭わない、反骨とは真逆、いわば「反・反骨」の人としての彼の側面が浮かび上がってくる。だが、本稿の目的はそのことをもって「高橋鐵の変節」や「権力への阿り」を批判することではない。彼のこうしたスタンスは、広告業界における活発な作品発表を見ても判る通り、自身をさまざまな手段―時にあざとさすら感じさせるほど

の―によって最大限に権威付け、社会の耳目を集めることで、常に「時代の提言者」たろうとした姿勢の現れであり、同時にそのことが彼の本来の在りようだったのではないだろうか。

すなわち、論者は、戦後反骨・反権力の人として社会的に認知された高橋鐵と、戦前の高橋鐵との間に「齟齬」や「裏切り」、一貫性の断絶があるのではなく、常に高踏的・衒学的な姿勢で自身の権威性・卓越性を強調しつつ、一方でその時々における社会のニーズを巧みに察知し、それに対応し続けることで「第一線の〝知識人〟であり大衆への提言者」たろうとした姿こそが、高橋鐵本来の作家的な在り方―つまり「反・反骨の大衆作家」としての高橋鐵―だったことを提唱したいのである。第一節で触れたように、今日において高橋は『あるす・あまとりあ』をはじめとする性研究関連の仕事を中心に評価され、反権力・反権威の姿勢を通じて「性」を語ることにその生涯を捧げた人物としての評価が主流である。しかし、高橋本人にとってはそうした姿もまた、「大衆への提言者」たるために必要とした〝衣装〟の一つであり、社会の需要（ニーズ）に応える形で自らの立ち位置を確保しようとした計算の結果だったのではないだろうか。

そのようにしてまで彼が「時代の提言者」たらんとした読みの正しさは、『あるす・あまとりあ』をはじめとする彼の性関連著書のヒットと、「高橋性学裁判」により彼自身が「反骨・反権力」の偶像として君臨したことによって証明されたと言える。その点において、権力の弾圧と戦い続けた「性の殉教者」として悲劇的に語られてきた高橋の活動も、実は常に「大衆への提言者」たろうとした彼の本質からすれば「殉教」ではなくむしろ「勝利」に他ならないのではないだろうか。そうしたある種の悲壮な「勝利」を貪欲に求め続けた姿こそが、『南方夢幻郷』と同時期の作品をめぐる彼の多様な動きの中から浮かび上がる、高橋鐵という作家、そして「高橋鐵というメディア」の本質なのである。

六　性メディアにおける高橋の役割

戦後、高橋が「性研究者」として世に送り出した著書は、戦後間もない、未だ生活再建もままならぬ人々が多い時代においても「他者の性生活を知ること」が極めて魅力的なメディアコンテンツであることを証明した。同時に、そこに精神分析や広告理論を典拠とする衒学性と、川柳による例示など親しみ易い解説を付加することでその啓蒙性・公然性を強めた装いを凝らした点に彼の「性科学もの」の目新しさと強みがあったと言えよう。同時に、戦後性を扱ったメディア出版物が漸次解禁され読者に受容されていく中で、高橋の著書が持つ啓蒙性・公然性は読者がそれを手に取り、性の知識を得る際の大きなエクスキューズとなったことは間違いがない。そして本稿で述べたように、そうした彼の著述テクニックは高橋が戦後突如として獲得したものではなく、彼の戦前の活動、そして成長から紡ぎ出されたものなのである。戦後メディア環境が復興・成長を遂げ、グラビアや映画等視覚化された性関連コンテンツの充実と大衆化とが一挙に進行する中で、彼の著書・活動の影響力は徐々に減じていくこととなるが、性を「反権力」、あるいは「衒学性」の視点で語ること、言い換えれば、「性を語ることによる権力・権威批判」の先鞭となり、その「偶像（アイドル）」となることで、日本の戦後における性の受容モデルの一つを確立する役割―そしてそれは冒頭で挙げた大島渚をはじめ、多くの文化人によって継承されていく―を果たした。

晩年の高橋が、「性学裁判」を始めとする権力との闘争、反骨路線をそれまで以上に強めた裏には、こうしたメディアにおける自らの立ち位置、周囲の状況変化を見据えた上での、彼なりのパフォーマンスと計算があったと見なせよう。こうした点からも、高橋の活躍とその変転とは、昭和戦後の（性）メディアの変遷、そしてその消費のあり

方と密接につながっているように思われる。同時にそれは高橋とその著書を通じた「戦後の性メディア変遷史」を見る可能性をもまた予期させるものと言えよう。論者は今後本稿を足がかりとしつつ、高橋の個人研究にとどまらない、昭和の性メディア変遷史を探る試みを続けていく所存である。

注

（1）管見の限り、高橋が戦前に東京精神分析学研究所機関誌『精神分析』を通じて発表した論考やエッセイ二十四本のうち、「性」を直接的な題材としているものは六本に留まる。他媒体での発表作は本稿第三節で触れた通りであり、戦前の高橋は「性」そのものよりも精神分析を応用した表象論、広告論を主軸に活動していた様子が見られる。

（2）高橋自身は、同作がアイヌと大和民族の対立を描いたためとしているが、実際に当局の「弾圧」があったか否かも含めて詳細は不明である。今後の調査課題としたい。

（3）国立国会図書館蔵。

（4）明治三十七年生。公爵。岩倉具視の曾孫にあたる。本文で触れたように高橋とは東京精神分析学研究所を通じた知人であり、昭和十三年に高橋がフロイド賞（同研究所主催の論文賞）を受賞した際にも銓衡委員を務めた。

（5）会長は終戦による解散の時点まで空席であった。

（6）『性愛五十年―実例・文献・統計による―』（昭和二十四年・千代田社）二三八頁。

（7）『日本電報』昭和十六年九月号に「日本宣伝技術家協会設立について」が掲載されており、その記事中（四十六頁）に高橋は常任理事の一人として名が挙げられている。

（8）高橋は精神分析に関する論考、エッセイでこの「水」に関する言及を繰り返している。『精神分析』昭和十年一・二月号に掲載したエッセイ「水に誘はれる人の精神分析」で、水は「胎内空想」（＝母性、母体）の象徴であり「水への耽溺は、偉大な母への感傷愛である」（同五十六頁）との持論を掲げており、「怪船「人魚号」」、「浦島になつた男」は明確にこの要素を取り込んだ内容となっている。個別の論考については稿を改めたい。

（9）本書「まへがき」を、高橋は「私の作品を欣んで下さつた木々高太郎・小栗蟲太郎・橘外男諸氏のお力添へ」（六頁）について触れた一文で締めくくるなど、木々らを先行作家として強く意識していたことは確かと思われる。

（本稿は全国大学国語国文学会第一〇七回大会（平成二十五年六月）での発表に基づいています。会場から貴重なご教示を賜わったことに感謝申し上げます）

平成二十六年年八月二十日　提出